

中世

第5章 武家政権の成立 5. 鎌倉時代の社会と文化 (2) 荘園と地頭

じとう 地頭の荘園侵略 — 東郷荘下地中分絵図 —



「東郷荘下地中分絵図(模写本)」(東京大学史料編纂所蔵)★

解説

鎌倉時代、諸国には守護と地頭が置かれた。地頭となった武士たちは各地の荘園の年貢を押領し、荘園領主と対立を繰り返した。

荘園領主は地頭の押領を防ぐ方法の1つとして、荘園の土地を地頭と折半し、それぞれが独立して支配する契約を結んで解決しようとした。これを下地中分と言う。

鳥取県中部の湯梨浜町にある東郷池周辺は、中世には京都の松尾大社の荘園である東郷荘が広がっていたが、地頭である原田氏の押領に悩まされていた。そこで、荘園を下地中分し、「地頭方」「領家方」に折半することにした。

この絵図は1258(正嘉2)年に領家と地頭の間で下地中分がなされた



現在の東郷池周辺

時に「地頭方」「領家方」の2つに折半した様子を示した図面で、全国的にも珍しく貴重な資料。朱線によって境界が示され、幕府の執権と連署が花押(サイン)を据えている。沖合には日本海を東から西へ航行する帆掛け船もみえる。

(担当：岡村吉彦)

Q：考えてみよう！
下地中分絵図と現在の写真を比べてみましょう。どのような違いがみられるでしょう？

参考資料

・「東郷荘絵図」徹底解説ガイド(湯梨浜町企画課・同教育委員会発行、2009年)ホームページで公開中。

★の写真は教育活動以外での無断利用や転載を禁止します。